

大内氏遺跡

りょう うん じ あと

# 凌雲寺跡

## 大内氏とその遺跡

大内氏は、室町・戦国時代に山口を本拠として、守護大名から戦国大名へと成長し、西日本で大きな影響力を誇りました。

大内氏ゆかりの館跡・築山跡・高嶺城跡・凌雲寺跡の4遺跡は、史跡「大内氏遺跡つきやまあと こうのみねじょうあと附凌雲寺跡」として、昭和34年(1959)に国の史跡に指定されました。

山口市には、国宝の瑠璃光寺五重塔をはじめ、大内氏ゆかりの歴史文化資源が数多く残されています。

## 凌雲寺とは

凌雲寺は、開基が大内義興よしおき、開山が了庵桂悟りょうあんけいごと伝えられ、大内氏の当主であった義興の菩提寺とされています。

宗派は、了庵桂悟をはじめとする凌雲寺にゆかりのある僧侶がいずれも臨済宗であること、大内氏の菩提寺の多くが臨済宗であることから、臨済宗であった可能性が高いと考えられます。

創建は、文献史料から16世紀初頭と推定されていますが、廃絶時期は不明であり、おそらくは大内氏の滅亡とともに衰退に向かったと考えられます。

## 凌雲寺ゆかりの人物



大内義興像(山口県立山口博物館蔵)



了庵桂悟像(大東急記念文庫蔵)

開基とされる大内義興は、文明9年(1477)に生まれ、明応3年(1494)に父政弘の病死に伴い家督を相続しました。明応の政変で京を追われた前將軍の足利義植(当時は義尹)を山口にかくまって8年間滞在させた後、永正5年(1508)には義植を奉じて上洛し、將軍復職に大きく貢献しました。

開山とされる了庵桂悟は、応永32年(1425)に生まれ、東福寺や南禅寺を拠点に活躍し、永正11年(1514)に没しました。また、雪舟とも親交が深く、文明18年(1486)に雪舟の住まいである天開図画楼を訪れ、『天開図画楼記』を記したほか、永正4年(1507)には、他界して間もない雪舟の山水画(国宝)に賛を寄せています。

## 凌雲寺ゆかりの文物



開基・開基の室・開山の墓とされる石塔群



以前の小祠内の様子(左から了庵桂悟像、阿彌陀如来像、十四神名牌)

凌雲寺跡の北西部には、開基・開基の室・開山の墓とされる宝篋印塔が3基残っています。開基墓とされている石塔はその特徴から南北朝時代のものとみられ、残る2基についても複数の石塔の寄せ集めであり、本来の組み合わせではありません。

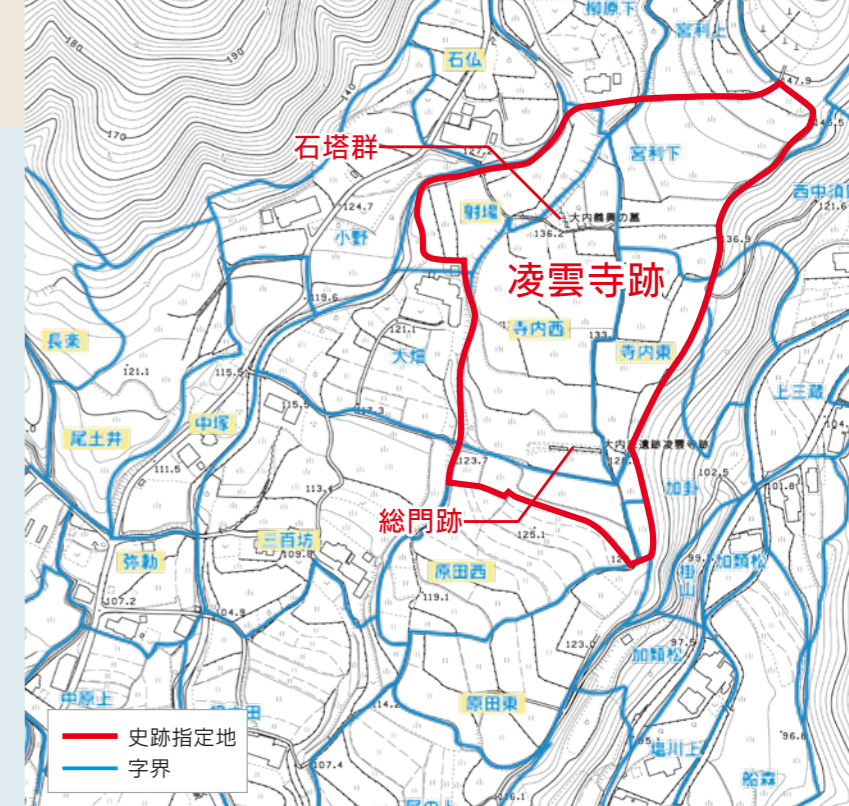
石塔群の背後にある小祠は近代以降の建造で、了庵桂悟像、凌雲寺の本尊とされる阿彌陀如来像とその由来を記した弥勒菩薩略縁記、十四神名牌などが伝来しています(現在は山口市歴史民俗資料館の所蔵)。

この他、吉敷佐畑の玄濟寺に伝わる大内義興位牌と毘沙門天立像も、もとは凌雲寺にあったとされ、中尾の高源院を経て昭和19年(1944)に同寺へと移されました。

## 凌雲寺周辺の地名

総門跡の前面から石塔群までの字名は「寺内西」「寺内東」であり、南側は「原田西」「原田東」であることから、総門跡から北側が寺域であったと考えられます。これを裏付けるように総門跡から南側では、遺物の出土が少なくなります。

また、周辺には「三百坊」「弥勒」「中塚」「長楽」といった宗教色の濃い字名がみられ、凌雲寺に関する塔頭などの存在を示唆します。このほか、「尾土井」(御土居、土墨・土堀の尊称)や「射場」「石仏」といった地名もみられ、これらも凌雲寺と何らかの関連がある可能性があります。



凌雲寺跡周辺の字界

## 凌雲寺をめぐる諸説

広島県広島市東区の不動院金堂は、中世後期を代表する禅宗建築として国宝に指定されています。寺伝では、天文9年(1540)に大内義隆が山口に建立した仏殿を安国寺恵瓊が広島へ移築したとされ、凌雲寺がその有力候補とされてきました。しかし、天井面に添えられた墨書に「心月受竺」の名があり、これが香積寺(現在の瑠璃光寺)の住持であることが判明しました。このことから、近年では香積寺の仏殿が移築されたとする説が有力になっています。また、不動院金堂が柿葺や檜皮葺を前提とした屋根構造であるのに対し、凌雲寺の中心部にあった建物は、発掘調査から本瓦葺であったとみられます。こうした屋根構造の違いは、これらの説を考えるうえで1つの手がかりとなります。

【出典】凌雲寺移築説：広島市教育委員会1983『不動院』広島市の文化財第23集、三浦正幸1998『不動院』『総覧 日本の建築』第8巻 ほか  
香積寺仏殿移築説：関口欣也1998『不動院金堂と瑠璃光寺』『仏教芸術』236号



不動院金堂

瑠璃光寺(旧香積寺)五重塔



## 凌雲寺跡の発掘調査

凌雲寺跡では、史跡の実態を解明するために平成19年度に地中レーダー探査を実施した後、平成21年度から令和4年度にかけて、11回にわたって発掘調査を行いました。これまでの調査では、石垣・階段状遺構・礎石建物・礎石列・石敷などの寺院に関連する遺構を確認しました。

また、史跡指定地の中央部では、瓦や<sup>せん</sup>塼が多数見つかり、瓦葺きの建物が存在していたと考えられます。

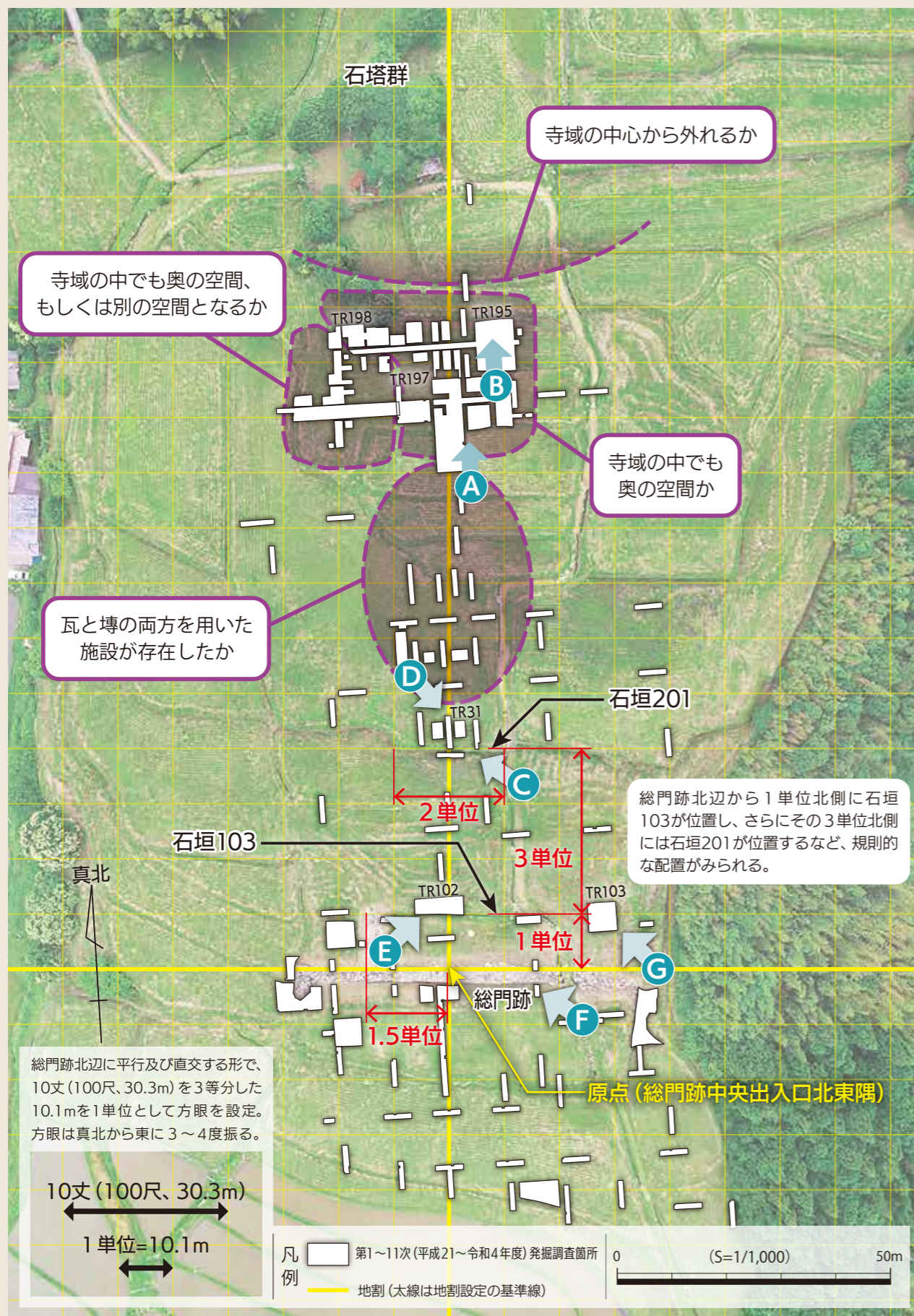
これらの遺構は、総門跡の中央出入口の北東隅を原点とした10.1m間隔の地割(区割、10.1mは10丈(100尺、30.3m)の1/3)に平行および直交する規則的な配置を示します。このことから、史跡指定地の南部～中部にかけて、同一の地割により施設が配置されていた可能性が高いと考えられます。

また、凌雲寺の廃絶時期は不明ですが、発掘調査や文献史料からは、遅くとも18世紀後半～19世紀前半には現在のような棚田景観へ変化したと考えられます。



第9次調査調査風景(北東から)

# 凌雲寺跡の地割と主な遺構



**A** TR197 礎石列等検出状況(上が北)

東西方向に並ぶ礎石列とその北側に位置する石列や石敷などにより構成される。礎石列は最短で9.59m、最長で19.36m(桁行4~5間以上)。建物本体の構造は不明であるが、周辺から出土した遺物や凌雲寺の想定される中軸線上に位置することから、方丈や庫裏、僧房といった居住空間であった可能性がある。



**B** TR195 礎石建物301検出状況(上が北)

1辺約5.5mの小規模な建物跡。平面形はほぼ正方形。建物が小規模であること、凌雲寺の想定される中軸線よりやや東側にずれて位置すること、またこれより北側では瓦の出土量が減少し、この一帯が奥の空間であると想定されることから、この礎石建物は伽藍の中心的な建物ではなく、開基や開山などを祀る場所であった可能性がある。

TR31 階段状遺構検出状況(北西から)▼



**C** ▲石垣201(南東から)

石垣201は中央に出入口をもち、その背後の調査で推定8段となる階段状遺構を確認。棚田が作られた際に出入口は埋められ、石垣は小振りな石材により積み増しされている(破線から上の部分)。



**E** TR102 石垣103・階段状遺構検出状況(南西から)

石垣103は下半部が凌雲寺のもので、上半部は棚田が作られた際に積み増しされたもの。この石垣103の背後を調査したところ、推定3段となる階段状遺構を確認。寺域の中心部へと向かう参道の一部とみられる。



**F** 総門跡(南東から)

全長約66.6m、高さ約2.6m。中央部と東部に出入口をもち、石垣の西端部が南側に短く屈曲する。周辺で産出する花崗閃緑岩の巨石を多数用いて入念に積み上げており、朝鮮半島の山城や琉球のグスクとの類似が指摘されている。



**G** TR103 石垣103検出状況(南東から)

棚田造成に伴い埋め戻されていた石垣103の続きを確認。1mを超える巨石を鏡石として使用している。

## 凌雲寺跡の出土遺物

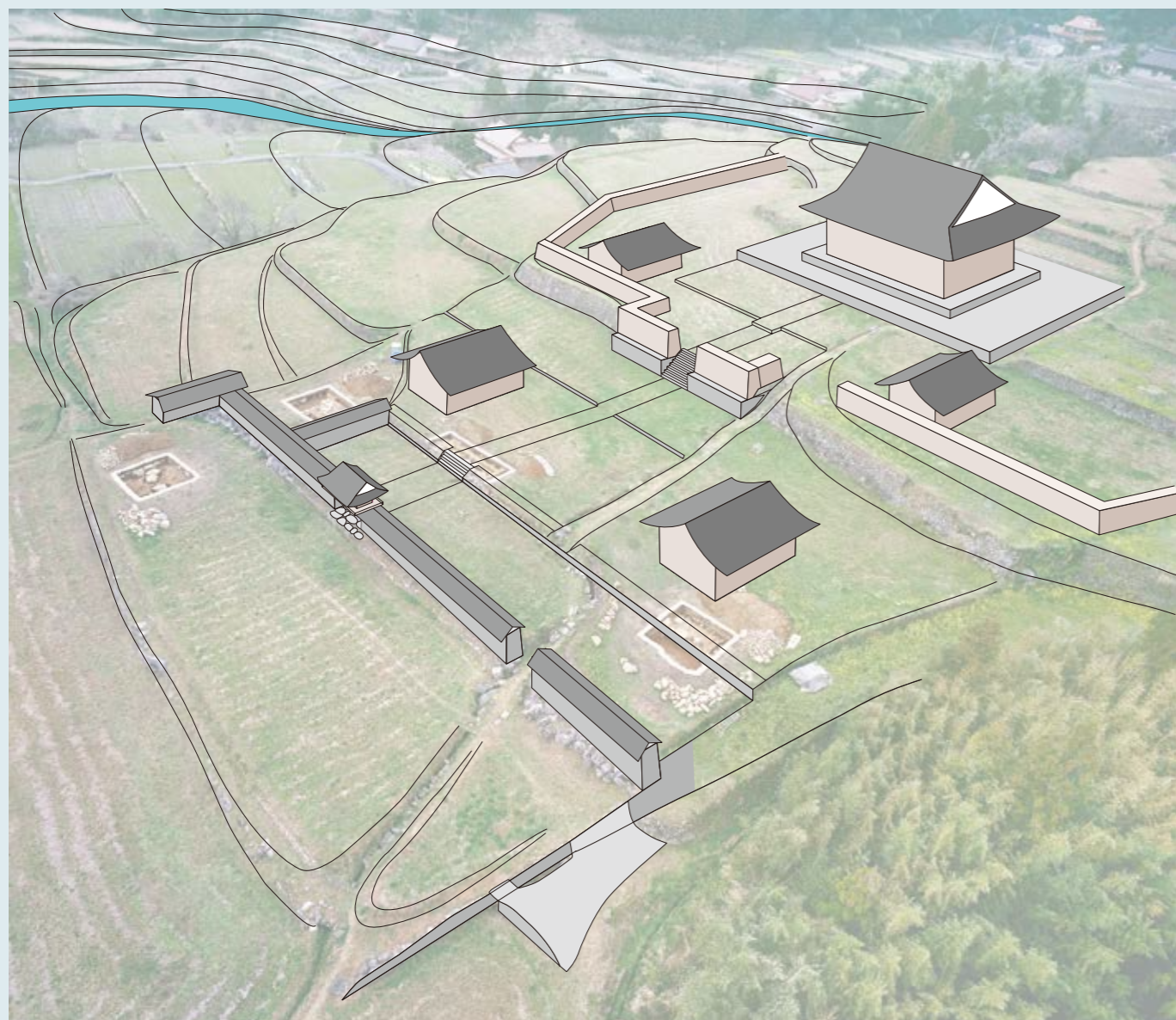
遺物は、瓦や塼、土師器皿、瓦質土器、貿易陶磁器、国産陶磁器などが出土しています。時期は16世紀初頭～中頃のものが多く、文献史料から推定される寺院の存続時期と概ね一致します。

瓦は本瓦(平瓦・丸瓦)を中心とすることから、基本的には本瓦葺の建物があったと推定されます。礎石建物301付近では瓦の出土量があまり多くないので、一部に植物質の屋根材を用いた建物も存在した可能性が考えられます。軒瓦には、大内氏に関連する他の遺跡で出土した軒瓦と同じ型で作られたものや、同じ文様をもつものがあるほか、大内氏の

家紋「大内菱」の可能性のある角菱文をもつ軒平瓦などが確認されています。

塼は、床材として斜格子状に敷かれていたものと考えられます(四半敷)。中世において塼敷の瓦葺建物は禅宗寺院に限られることから、凌雲寺が臨済宗であるとの推定を裏付けます。

また、土師器皿には、在来系と京都系の2種類があり、凌雲寺跡では後者が多数を占めます。その割合は大内氏の政治拠点である大内氏館跡に匹敵し、凌雲寺が大内氏と深い関係にあったことが出土遺物からも窺えます。



凌雲寺復元イメージ図(第7次調査までの成果をもとに作成)



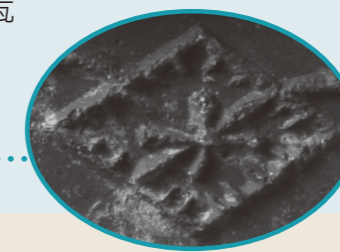
発掘調査で出土した瓦や塼



四半敷の例(洞春寺観音堂内)



角菱文をもつ軒平瓦



## 廃絶後の凌雲寺

「弥勒菩薩略縁記」によると、弘治元年(1555)に諸堂は焼失し、「御廟所」のみが残ったとされています。このことから、寺院が廃絶した後も、しばらくは一部の施設が残っていたと考えられます。しかし現在では、石垣を残すのみで、史跡指定地のほぼ全域が棚田となっています。

発掘調査からは、この場所が棚田となったのは18世紀後半から19世紀前半頃と考えられます。一方、文献史料からの調べによると、宝暦13年(1763)には史跡指定地の全域が水田となっていたとされます。このことから、水田化はそれよりも前に始まっていた可能性があります。

また、棚田にするにあたっては、凌雲寺の遺構を埋めて平坦面を広げたり、石垣の石材を利用して暗渠にするなど、改変が複数回にわたって行われたことが明らかになりました。

この他、TR198では寺院廃絶後に構築された墓地(石組や基壇状遺構など)が見つかっています。このことから、一時期には棚田とは異なる土地利用がされましたが、いつしか改変され、次第に現在のような棚田へ変化していったと考えられます。



弥勒菩薩略縁記



TR198 石組群・基壇状遺構301など

